

MRA関西秋季大会開催さる

(10月1、2日神戸市 住友金属工業住吉研修所にて)



■ 関西MRA大会報告 1
 ■ ゴードン・ワイズ夫妻来日 4

■ 中華民国会議レポート 6
 ■ あの時、この人 その4(英国編) 10
 その他

（上の写真の中で右のお二人がワイズ御夫妻）

家族的な雰囲気売り物のこの大会、今回も全体会議、分科会、また食事の場を通じての対話と、会が進むにつれて打ち解けた雰囲気がかもし出され、閉会式においては、それぞれの決意を語る人々に対し、暖かいまなざしと励ましの拍手が送られた。

以下、関西MRA世話人会の方々から、体験や感想を報告して頂いた。

「日本でも、ともにMRAを学び、おのおのが変わっていきけるきっかけをつかめるような場をつくりだしていこう」というねらいで、関西チームの有志の方々が始められたこの大会も、今年で既に六回目を数える。

両日とも快晴に恵まれ、参加された八十名の中には、イギリスのワイズ御夫妻、中華民国の劉毓棠(タニエル・リュウ)博士(中国文化大学教授・道徳武装研究所主任)、またドイツからはラルフ・ウェハウス博士(イバンジヨリカル・アカデミー所属)の姿も見られた。

関西秋季大会報告



息のあった司会をする兼松夫妻

◇住友義輝

(住友電工株式会社)

イギリスからゴードン・ワイズ夫妻が、台湾からはタニエル・リュウ博士が参加されたことを、心から有難く思う。

暖かな雰囲気の中に心を開くのが、この会である。普段は気がつかないでいることが、また気にはなっているけれども整理されないで追いやられていることが、この会では思いがけなく大きく浮び上がって来る。それがほかでもない、自分自身にその芽があり、それが今回のテーマ「明日の世界に誰が責任を持つか」につながっているのである。

毎年入れ変わって数名参加される九州の方が、「九州に帰って一ヶ月くらいみんなの顔が生き

生きと明るくなる。」と言われたが、これは私のことではないかと思つた。

いつでも、どこでも、心のアンテナを上げさえすれば神の声を聴くことができる。聴きとりにくい時は、はっきり聴こえるまで時間をかけても波長を合わせることを、これから心掛けたと思つた。

◇住友美子

八月のアキノ氏射殺、九月の大韓航空機撃墜、十月の韓国閣僚爆死——この世界情勢の中で

解答となる生き方は何か、何の為にMRAの考えを実践しようとしているのか、何か一番大切な要素がこの何年か忘れられていたような気がする。自分の中の大きな理想が失われている時人への愛情も神への愛情も、忘れない感情に流されるように思う。何の為に心の開国をしなればならないのか、なぜチームを作るのか、もう一度原点に戻って、本当にやらなければならぬことに絞りたい。与えられた人生の、そう長い時間を無駄には出来ない。最も必要とされている場所と人に、心を手

え続けたいと思う。本年もまた多くの方々の御援助によってこの集会が開けたことに、心から感謝している。

◇沖田幸治

(日立造船株式会社)

集会を終えて、例年のことから、快い疲労感と共に湧き上がってくる新鮮な息吹を、そつと大切に温めて帰途についた。効率化、合理化、省力化と、どうして無駄を省くかに専念している毎日であるが、ことMRAの会合の準備や運営に当っては

この原則は通らない。心を使い気を配り、手足をフルに働かせ汗を流しての、全くの手作りの奉仕でなければならぬ。グループのチームワークを嫌でも応でも強固にしなければ、参加して下さった皆さんに迷惑をかける。それにしても、毎回東京から馳せ参じて下さるフルタイムワーカーの方々に大いに助けていただき、申し訳ない気がする。出席の皆さんには、何よりも楽しく快適な二十四時間を過ごしていただくこと、多くの友人をつくっていただくこと、そして新しい出発のチャンスをつかんでいただけるよう奉仕す

ることに努めているが、力の足りなさを感じる。

ワンパターンになって形式に流れないよう、より新鮮で感動的な催しとなるよう、来年も工夫したい。そしてより多くの方々が楽しみに待っていて下さるような会にするため、チームの皆さんと心を一つにして、今から準備にとりかかりたい。

◇佐藤健治

(株式会社ダイエー)

「人はメッキをはがした時に初めて、素直に感激できる感受性を保つことが出来る。MRAは私にありがたいと思う気持、新鮮にさせてくれる気持を感じさせてくれる。」という相馬雪香さんのお話に深い感銘と共感を覚えたのは、私一人だけではないと信じます。

今年も「奇跡的に」開催出来た関西秋季大会は、私にとつては長年たまったサビやメッキを取り除く、船に例えれば「ドック入り」とも言える貴重な機会です。心のゴミを取り払い、虚飾のメッキを削り取った後の素直な心に響くことを、何か一つ実行してみることに——このため

にはまず第一に、朝きちんと一人で起きて静かな時間を持つのだ、とひそかに決意した次第です。読みたい本、見たいテレビ番組、遊びたいこと、その他やりたいことを山ほどかかえている忙しい現代人。でも、本当に大切なことを考える時間をほとんど持たないかわいそうな現代人。私はそんな現代人には決してなりたくありません。

◇畑 克己

(株式会社ダイエー)

私にとつて、昨年に引き続き二回目の参加でした。私は、この大会でおもしろいことに気がつきました。

今まで私は、MRAの人達は気持のやさしい紳士、淑女ばかりだと思っていました。つまり東洋的な「和」を大切にする人ばかりだと考えていました。しかし、実際には非常な信念を持つた(ある意味ではガンコなまでに)、自己主張の激しい人達であることを知ったのです。それに気づいたとたん、なるほど「絶対正直」「絶対純潔」「絶対無私」「絶対愛」の四つの絶対標準が基本姿勢になれば、互いに

ケンカばかりやっていなければならぬと思いましたが。つまり、欧米的に徹底的に話し合い、そのコミュニケーションのなかから、解決法を見い出していくという考え方だと思います。自分の考え方を相手にわからせる努力——MRAではこれが必要なのでしょう。

◇多羅みちえ

(住友電工株式会社)

秋の集会を終って、私にとって大きな感動であったことは、この会が、私達以上の大きな力で運営されていたと感じたことでした。何かを犠牲にして集まって下さった方々、一人一人の努力以上に、精神的なネットワークスとなるような会でした。

私達一人一人の在り方が国の在り方であり、明日の世界に責任を持つのも、また私達自身です。どんな大きな目標でもステップがあり、それを一步一步、歩んでゆかなければなりません。でも一步一步進んで行く時に、足下ばかり見えていて目標の道から外れないように、いつもその目標を見ていなければなりません。今、私に与えられている仕事、自分の身のまわりでまず正

さなければならぬこと、やるべきことが、必ず次のステップへとつながることであると信じて、努力していきたいと思いません。

◇春海隆彦

(ヨコタ工業株式会社)

何といっても今回の大会で忘れられないのは、二回目の全体会議の最後に兼松先生が御披露下さった詩において、「イエス・キリストは、常に一緒に歩いて下さっているだけではなく、困難な時には抱いて歩いて下さる。」と御教示いただいたことです。感激し、深く肝に銘じました。

●話をされる九州の福田氏
(西日本相互銀行)



「足跡」 作者不明

ある夜ひとりの男が夢を見た。
それは、主と二人で浜辺を歩いている夢であった。
空には彼の生涯の様々な出来事がうつつていた。
其のひとつひとつのシーンには、砂の上に二組の足跡が印されてあった。
ひとつは彼の足跡であり、ひとつは主の足跡であった。

彼の生涯の最後の光景がうつし出された時、男は砂の上の足跡を振り返って見た。
ふと気付いてみると、彼の人生の様々な場面の中で、足跡がひとつしか無い事に気がついた。
しかもそれは、彼の人生の中で最も苦しく悲しい時の場合であった。

彼はその意味が解らなかった。
男は主にたずねた。

主よ、
私があなたに従うと決心すれば、生涯私とともに歩



いて下さるとおっしゃったではありませんか。

しかし、私の生涯で一番苦しく惨めな時に足跡がひとつしかありません。

私には理解できません。

私があなを最も必要とした時に、
何故私から離れていたのでしょうか。

主は答えて言われた。

私の大事な大事な子供よ、

私はあなたを愛している。

私はあなたから離れた事は一度もない。

あなたが一番苦しく悩んでいた時に、足跡がひとつしかなかったのは、私があなを抱いて歩いたのだ。
私が両腕に抱き上げて歩いたのだ。

兼松 正氏の訳による

同氏が全体会議のしめくりに朗読されたものを、多数の参加者の皆さんのご要望により、掲載させていただきました。

英国MRA理事

ゴードン・ワイズ夫妻

来日(9/28—10/18)

ワイズ夫妻と共に すごし学んだ日々

榊 たか子

この夏、ロンドンのMRAハウスでお世話になった時、ゴードン・ワイズ夫妻から秋には日本を訪れると伺い、再会を約して帰国いたしました。その時は、ワイズ夫妻が世界の人のためにあらゆる面で献身的に奉仕し、絶えず人々のために何を為すべきかを考え行動している姿に接し、今度日本に見えた時は、可能な限り私のすべての時間をワイズ夫妻と共にし、少しでもお役に立ちたいし、又学びたいと決心しました。

十月一日、二日の関西MRA秋季大会にお迎えし、私も第五分科会の責任をとらせて頂き、いまの日本に社会に何が必要かを多くの人々と共に考え、素晴らしい時間を持つことができました。

十月七日には、高瀬会長の御努力によって大田原の新会員の

方々を中心に、ニュー・セントアンドリュース・ゴルフクラブで行われたミーティングでは、二百名近い方々の前で、それぞれの体験を語られました。自分が変わることによって家庭が変わり、そして社会に大きい影響を与えること、誰でもが相手が変わるのを待っているが、自分から始めないでなんで人を変えられることができるであろう。また、世界の平和もお互いの信頼から始まるのではないかと語りかけ、出席された方々も熱心に耳を傾け、誰一人席を立つ人もなく、得難い時を持つことができました。そして十四日は、埼玉県の知事夫妻のお招きを受け、公館での夕食会——ここでもワイズさんは、前回知事にお会いした時のことを昨日のこのように思い出し、信頼の上に立った友として語られました。知事が、「MRAの人とは心を開いて話すことができる。」と、いつも喜んで迎えて下さることを私は感謝し、又、千鶴子夫人も、是非折をみてコーの大会にも一度出席したいと言って下さったこ

とを嬉しく思いながら、公館を辞しました。

翌十五日朝は、浦和の有志二十六名が集まった別所沼会館で、ワイズ夫妻、相馬雪香さんを囲んだのミーティング、午後は田端のハウスで、東京での最後のチームミーティングが行われました。夫妻の数々の素晴らしい教えと、暖かい人柄から生まれるほのぼのとした愛情を私達の心に残して、夜の激しい雨の中を、最後の訪問地水戸へと向かわれ、十六、十七日と会合に参加されました。

十月二十八日にワイズ夫妻が来日されてから、休む暇とてなく精力的に各地を訪れ、各界の知己を尋ねられ、その果たした役割は舌筆に尽くせぬことを、今更ながら感じております。ロンドンで決意した、ワイズさんと共にありたいという念願が、不十分ではあれ私なりにかない、この二十日間を有意義に過ごすことが出来ました。

この間いろいろとお世話になりました。各地のみなさまに感謝し、この経験を明日に生かすために、更に努力することを誓ってペンをおきます。

◇マーティン・ワイズさんの話

私は、単にMRAに参加しているというより、MRAによって自分の全てを捧げて生きる目的を得た、と云えるのではないかと思います。その為には犠牲を払う事も必要でした。然し、幼い時に夢に描き、想像していた以上の冒険に満ちた一生を、送る事が出来たと思います。勿論、何度も自分が変わらなければなりません。先ず朝、目が覚めた時から始まります。私は出来るだけ長く寝ていた方ですし、又、主婦なら誰もがそう思うでしょうが、起きてすぐ仕事を始めたいと思うからです。朝、一時間静思する時間を持って、自分の心の声に耳を傾けるのですが、そのお陰で効果的に一日を送る事が出来、それはかなりでなく、静思する時に心の奥にひそんでいる心の動きに気が付く事もあります。心の奥底に押えつけている感情は、無意識の内に自分の性格に影響を与えているのです。

私がMRAに出会い、この世界勢力の一員として最善を尽くしたいと念願し、全力を尽くして生きようとした時、何か足が鎖でつながれている様な思いがしてしまいました。ある時、静かな時間を通して、深い心の傷に気

がつかしました。「お前は父親を恨んでいる。」という声が聞こえてきた。私が七才の時、三人の子供と母を残して家出した父を恨むのは当然で、心に残った深い傷も父のせいだと信じていました。思わず涙がこみあげて来たのですが、この事に直面できた重荷から自由になる第一歩となりました。そして次に、「父が何をしたにしろ、お前が娘である事を拒む口実はない。」という考えが浮かびました。時間はかかりましたが、私は娘として父に心を開く事を学び、父との間に全く新しい関係を築き始めました。継母も、温かい心と思いやりが必要な人として、実母とは違った意味で、心を開いて愛せる様になりました。

これらの事は大変個人的な話だと思われるかも知れませんが、誰もがかかえている個人的な重荷から自由になって初めて、自分という小さい「枠」を越えて、まわりの人の事、地域社会、また世界についても責任をとれる様に、心が開かれてくると思います。私の様な、ごく普通の小さな者にまで計画を持つ全能の神がおられるという事は、驚くべき事です。そして、新しい変革の経験をもち、それを互いに分かち合うことが大切なのです。

各地の会合から

大田原講演会報告

最初に立たれた相馬さんは、「MRAとは、いわば『羊洗ひ会』とでもいうべきもので、お互いの心を洗い合うものです。人を指さす時、三本の指が自分に向くのです。人の批判をしても楽しくはありません。絶対正直・純潔・無私・愛という四つのものさしを持って、心の声に聴くという生き方をした時、直接他の国に向いていかなくとも、それが世界に光を与え、平和を作る力となっていくのです。」と話されました。御自身のお姑さん達との関係を、どのように変えていかれたかという具体的なお話、共感を持たれた方々も多いようでした。

なさい」と謝まる勇氣を持てるようにもしてくれました。」と述べられました。

ワイズ氏は「戦争のために捧げた命を、戦後は、世界の平和作りのために捧げる決意をしました。」と述べられ、MRAが戦後に国家間の和解作りに果たした役割について言及しました。また、「政治的スキャンダルを非難する前に、自分自身の中の不正直さなどを直すことこそが必要で、自分を顧みる静かな時間を持つことは、精神のジョギングとも言うべきものです。MRAは、正しいことを選択していくという生き方です。」と結ばれました。

最後にワイズ夫人が、御自身の体験を例に引きながら、増加する崩壊した家庭を建て直すためのMRAの役割と、主婦の立場からいかに世界のために貢献できるか、というお話をされました。

ゴードン・ワイズ御夫妻、相馬雪香先生をお迎えして、浦和MRAの人達とお話をお聞きする機会を与えられ、私にとって大変有意義な一日でした。御夫妻は日本を大変理解しておられ、貿易摩擦もMRAの精神で話し合えば早く解決するのではないかと言われ、MRAの精神は、自分自身が変わらなければ他の人も変わらないということ、と話されました。常に思いやりを持って人に接することにより、相手の人はだんだん変わってくる。いろいろな失敗をしても、常に努力していれば報われる等のお話をお聞きしているうちに、私自身の人に対する考え、接し方が、間違っていたことに気づきました。榊たか子さんを初めMRAの人達の、人々に接する心使いのこまやかさを知ることにより、MRAの人達ともっともっと接してゆきたいと思いました。静かに自分の心の声を聞くことによつて他の人に尽くす動機とする——とかく自己中心になりがちな私ですが、MRAの四つの教え「絶対正直・純潔・無私・愛」を胸に、明日からの生活の力に

したいと思えます。ゴードン・ワイズ御夫妻が世界中の平和の為に、献身的に活動されていることに心より感謝し、健康で息子さんの待つているロンドンにお帰りになることを、お祈りいたします。

◇阿部喜代子(司法書士)
お話の中でゴードン・ワイズ夫妻は、自分の我を捨てて自分勝手な希望を見直し、静かに自分自身の心を聞けば、自分のあり方から国のあり方まで考えられ、又、一人一人の心が世界中に影響を与えるということ、わかり易く説明してくれました。御夫妻は、朝に静かな時間を持つことを習慣にしているとのことでした。

MRAのメンバーになって日の浅い私は、御夫妻を初め会合に出席された方々が素晴らしい人達でしたので、感激いたしました。毎日を慌しく過ごし、心のゆとりのない私ですが、この会合ですがすがしい時を持つことができました。会合の後、私は、できるだけ自分自身の心の声を聞くようにするため、静かな時間を持つと心に誓いました。

◇長沢忠博
(埼玉県総務部旅券外事課)
私がMRAの事を初めて知りましたのは、昨年の四月に畑知事の通訳としてオーストラリアへお供した際、スータン・シェパード、オーストラリアMRA理事長を初めとする方々とお会いした時でした。

その後、国際MRA日本協会から本を送って頂いて拝読しておりますが、先日浦和でのMRAミーティングに出席させていただきました。その時の感激は今も忘れません。

「手には仕事を」、「心には神を」のお言葉を学び、また二十四時間のうちの一時間をガイダンスを得るために静かにして、与えられたガイダンスを紙に書くよう勧められ、その後実行して、私は舌で語るよりは心で考える方がよい事を学び、大変感謝しております。朝の一時間が変わると、残りの二十三時間が変わる思いがする今日この頃です。今後ともよろしく御指導下さるようお願い申し上げます。お礼の言葉とします。

浦和での会合に

参加された人々の声

◇片山 茂

(有限会社カタヤマ)

台南會議(中華民國)開催さる

亜州の出撃 精神武装



10月12日・13日の両日、中華民國(台湾)の台南において、「アジアの新たな精神攻勢」というテーマで、M R Aの大会が開かれた。奥深い精神文化を誇ってきた東洋の民族が、今再び精神的に武装することを学んだなら、必ずや混迷する世界に平和をもたらす鍵となることができるだろう」という確信のもとに、少数の若者達の呼びかけと働きによって開催されたこの会議には、シング・アウト(現在台湾の高校や大学に15ある、M R A合唱団)のメンバーを中心とした、約百名の若者が参加した。

この会議のねらいの一つは、シング・アウトの若者達に、本来のM R Aの考えをより深く理解してもらおうというものであ



●韓国M R A運動を推進される鄭濬(ジョン・チュン)先生
左は通訳をつとめた金さん。

る。「幸福で団結した家庭を築くものは?」「和を尊ぶ正しい社会を建設するための私の役割は?」「アジアと世界の将来あるべき姿は?」と、話し合いが進められるうちに、家族への思いやりが欠けていたと悔いる女子高生、無免許で乗っていたバイクを、会場から家まで乗って届けてくれる人をさがす大学生、会社で公然と行われていた手数料のピンハネや脱税行為を勇気を持って正し、後に「正直な会社」として信頼を高めたという貿易会社の話等、経験に即した話や決心が次々と披露され、参加者の心を打った。アジアの明るい未来のための芽が、ここにも芽生え始めていることが感じられた。

日本からは、相馬雪香さん、住友義輝・美子御夫妻、多羅みちえさん、高橋千恵さんの五名が、大韓民国からは、元国会議員の鄭濬氏の参加があった。台湾在住の韓国の青年が、長く祖国に圧迫と侵略を強いだ日中兩國に対して正直に心情を告白し、「過去の傷を乗り越えて融和の未来を共に築いてゆきたい。」と発言すると、台湾の劉(リュウ)博士が即座に立ち上がりて握手を求める。台湾の世界道徳重整運動基金会(M R A財団)の責任者を務める胡(フー)氏が、二十七年前にM R Aを紹介してくれた相馬さんとの再会を機会に新たな決意をする、という場面も見られた。閉会式では、地元参加者全員が大合唱をしながら外人ゲストのもとに歩み寄り、握手と感謝の言葉を一人一人とかわした。

時には英語を含めた四ヶ国語が飛びかい、三人の通訳を通しての対話は決して容易ではなかったが、同じ極東に位置し、顔かたちも文化も酷似したこれらの国々が、過去と現状とを乗り越えて理解し合うという、理想的な未来の縮図をかいま見たよ



●新たな決意を語られる、M R A財団理事長の胡(フー)氏
左は相馬雪香さん。

うな会議であった。
以下、台南會議に参加された方から、体験や感想を報告していただいた。



●台南の会議場

明るさと危機感の 交錯する国

高橋千恵

実際に国を訪れてみて、そしてこの国の未来を担っていくだろう若者達の屈託のない笑顔にふれて、外交的にはむずかしい状況におかれている中華民国（台湾）の将来について、より真剣に考えられるようになったと思う。

軍用機が二機つらなって、しばしば会議場上空を横切る。その耳をつんざかんばかりの音に、何度かスピーチは中断された。私に、自衛官の父を思い起こさせるような制服を着た中学・高校生がそこに見られる。このように危機感に満ちた国が、日本から二三時間で行ける所にあることを知ったのは、驚きだった。にもかかわらず人々の表情は明るく、子供は人なつこい。孔子の教えの影響、また子供の頃から植えつけられた危機感

のせいもあり、MRAの考えは概して受け入れやすい、と若い人が言っていた。道義について胸を張って話をする若者を見て、新鮮な感動を覚えた。学生や、MRAもほとんど初めての人達が進んで前に出て来て、小さな経験や決心を話せるような雰囲気の中で進められた会議だった。MRAは、どんな立場の人々にも受け入れられ得るものなのだということを再認識すると同時に、日本でも、しゃちほこばらずに誰もが話を出来るような雰囲気や創っていかねば、また若い人も話をする勇気を持つていかねばと思った。

● 明るい雰囲気の中で進められた
台南会議



台北の故宮博物館を訪れ、日本が中国から有形・無形の形で与えられたものの多さに、また中国人と日本人のつながりの大きさに驚嘆した。その直後に、元日本大使館の傍を車で通り過ぎる。今はからっぽだというその建物を見て、正式には両国間に国交はないんだということを実感し、悲しかった。と同時に、今もなお日本人の私達を友人として受け入れてくれる台南のMRAの友人達を、とても有難く思った。

中国と日本の関係について考える時、戦時下の日本の行為、また中華民国との国交の現状に對して、年配の世代を批判するのは容易だと思う。しかし、私達若い世代の中国の人々に対する姿勢や関心度として、決して感心できるものではないようだ。（私が蒋介石總統の偉業を知り得たのは、中華民国行の直前に慌てて小冊子に目を通したからである。）

これから将来日本は、二つの中国に對してどういう関係を築いてゆくのだろうか。隣国のかかえる困難をもとに分ちあっていけるだろうか。中国人、日本

人全体にとって最善の関係というものを、若い世代の一人として、模索していきたいと思う。煩わしいから無関心でいようーでは解答になるまい。日本は、同じく極東に位置する中華民国や大韓民国とともに、遅かれ早かれ同じ運命をたどるような気がするから。

国の未来に不安を抱いているとはいえ、捨てばちにならず自己憐憫にも陥らずに、目と心を世界に開いていこう、何とか建設的なことをやっていこうとする中華民国の若者がいるのを見て、大いに勇気づけられた。

あの人々が、特に仕事についている若い人があんなにイキイキしているのは、小さいながらも自分の身近から出来ることを、勇気をもって実行しているからかもしれない。だから新鮮で、自信に満ちているのだろう。いつまでもカビが生えなかったような昔のチェンジに頼ってばかりいないで、日々新たに精一杯生きてゆきたいと思う。

我々外国人ゲストのために、参加者全員が振り付け入りで歌ってくれた時のみな笑顔、目の輝き、会場一杯に響いた歌声は、忘れられそうにない。



アジアから世界へ 道義に結ばれた三ヶ国の役割

住友義輝

昨年MRAの会で紹介された、「歴史は教える」(大久保傳藏氏著)という小冊子を読んだ。終

戦時に蔣介石総統が、「怨みに酬いるに徳をもってする」として、わが国民によせた恩義の数々に、感銘を受けた。日本に対する賠償権を放棄し、二百数十万人の日本の将兵や居留民の帰国を促進し、軍隊の日本進駐を辞退して、日本をソ連が分割統治することを防ぎ、そして天皇制の護持を主張されたことなど、忘れてはならない歴史の一頁である。ところが、私は二十年ほど前、三回台湾を訪れたのに、台湾の人に二度もお詫びやお礼を言ったことがなかった。

日本は、これまではキャッチアップのために、アメリカやヨーロッパに関心を示すことが多かったが、これからは近隣の諸国と一緒に、アジアに於ける責任をとることを、思い返さなければならぬ時に来ている。台湾の劉(リュウ)博士は、今年春秋二回も日本のMRA大会

のために来日され、その劉博士から今回の台湾の大会にお招きをいただいた時、私は即座に、お受けしたいと思った。

ところは台南市の総合体育文化センター。一年前に完成したという会議場と、その隣の五階建の宿舎は、喧嘩からかけ離れた郊外の一面にある。ときは、中華民国の国父といわれる孫文先生の生誕記念日。ひとは台北、新竹、台中、嘉義、台南、高雄などから、若い人達を中心に百人くらい。

まず、会場の正面に、今日のために掲げられた孫文先生の写真に対して、開会の報告があり、青年たちの手で会が始まった。私は実のところ、中国語がこんなに歯切れのよい、スピードのあるものとは、その日まで知らなかった。前のスピーカーが話し終わるのを待ちかねたように、次から次へと自分の席からかけつけて、胸をはって道義に生きる所信を述べ、それに反対しようとする自分の妥協や周囲の反対に対して闘った体験を話す。人に強いるでもなく、恥ずかしがることもなく、目を輝かし、

● 経験を話す若い看護婦さん



日本の大会に参加した蔡貴珠さんが結婚して、その御夫妻が全責任を持って、十二人の台南の青年たちと共に、この会の準備から運営の一切をしているというのであった。この献身と犠牲の精神は、どこから生まれて来るのだろうか。

一、神のアジアに対する計画は何か？ 二、新時代の良妻賢母となるには？ 三、道徳原則を企業の中でどう生かすか？ 四、二十一世紀の新女性のあるべき姿は？ など、七つの分科会が設けられ、相馬雪香さんはリュウ博士や韓国の鄭濬先生たちと第一に、私の家内は第二、私は第三、多羅みちえさんと高橋千恵さんは第四に分かれた。青年たちの、大人の世界に対する不信、不満は少なくない。政治家への贈賄、情実の入社や昇進、金銭による他社からの引き抜きなどに疑問を持っていたが、自分がその立場になった時の苦しみを、合成ゴム会社の業務部副理の林(リン)さんは語る――香港に輸出する海上運賃は、二十二元であるが、三十七元の領収書が書かれ、その差額



● 会議の合い間の意見交換(右は住友美子さん)

私は台湾の事情は分からないが、日頃思っていることとして、「先端技術の開発は、いまや企業にとって最高の命題であり、それが日本の活力を生み出しているが、同時に人の姿勢に、特に今は謙虚さが求められる」ことを話した。人間以上の、より大きな見えないものの力のあることを、忘れてはならない。永く存続し繁栄している会社は、祖先を祭り道義を大切にしている。姿勢を正し、謙虚になれば、周囲の本当の姿が見え、何が正しいかが分かる。こざわりから解放されて心が自由になった時、会社にとっても、国にとっても必要な本場の活力が生まれる。忙しい時ほど、忙しい人ほど、神の声が低ければ聞こえるまで、心のアンテナを高くのぼすことである。

孫文も蒋介石も、MRAの創始者フランク・ブックマンの親しい友人であったし、張群先生（中華民国元首相、外相。蒋介石總統の右腕として、対日外交の責任者だった方、何応欽將軍は、いまMRAの絶大な後援者である。何応欽將軍は、今年中華テレビの顧問胡兆揚（フー・

ジョーヤン）氏に譲るまで、世界道徳重整運動基金会の会長であった。このような背景が、今回の会合に集まった百人の、胸を張った姿勢となつて現われたのであろうか。鄭濬先生は「韓国では、MRAに動員する青年の数ははるかに多い。しかし、その質には残念ながら格段の開きがある。」と述懐しておられた。

二日間の会が終わわり、台北に移つて、残された一日を劉博士御夫妻のお世話で、張群先生をはじめ、中央日報の曹聖芬さん、大同公司（会社）の林挺生さん、それに中国文化大学の宗道徳講論会の諸先生方など、著名な方々にもお目にかかることが出来た。

その劉先生（中国文化大学教授、元ニュージーランド駐在中国大使）は、台北市内のささやかなアパートの二階に住んでおられる。そして毎週二回、昼食時と午後六時にそこに若い人達が集つて話し合う。五人のときもあれば、二十人の時もある。そのほかに、英語で話し合う会もある。毎日をいかにフレッシュユに、新しく生きるかを祈りな

がら。そこに来た青年達は、スイスの世界大会に、オーストラリアの研修に、日本の大会に参加することを目標に、それぞれ資金の準備をしている。このリユー先生の信念に込めて、遠く海外からも浄財が送られて来るということである。

台南の会に集まった百人の数が、多いか少ないかは問題ではない。リユー博士御夫妻は、一人一人と神の声を一緒に聞き、一人一人のために祈つてこられたのである。台南の会はどこから生まれて来たのか、ようやく私はその解答を見出すことが出来た。

韓国の鄭濬先生と御一緒に、この会に参加できたことはよかった。共通の道義と精神を理解し合えるこの三国が、道義に生きることに力を合わせることが出来れば、アジア諸国に対してのみならず、アメリカ、ヨーロッパに対しても、大きな影響を与えることになるものと思う。



張群先生(中央)を囲んで……………

(劉博士は、張群先生の)
娘婿にあたる。

右のお2人が住友さん御夫妻 左のお2人が劉(リユー)博士御夫妻

市原登志子

私のイギリスでの滞在拠点となっていたここロンドンには、各大陸の中継地点です。大勢の人たちが、アメリカからヨーロッパから、またアジアからアフリカから立ち寄り、立ち去っていきます。私がMRAハウス・フォーティフォーの家族として約2年間滞在している間にも、ほんとうに多くのユニークな人たちが訪れました。オーストラリアからアフリカの戦争の調停工作にきた政府要人、共産圏からの亡命者、国をおわけてきた亡命中の国王一家、労使関係を悩む国インドから来た労働組合員、北アイルランドでの平和のために戦っている婦人など、さまざまな人たちが、それぞれの内におもいを秘めて訪れました。

ワイズ御夫妻を中心とするフォーティフォー一家は、このように来られる人たちを、地位が高かろうが低かろうが、金持ちであろうが貧しい人であろうが、年老いていようが若かろうが、心からお迎えし、その人にとって何が一番よいことなのかを皆で考え、一人一人が最善のものをもってもてなします。そうすることによって、その人たちがくつろいだ雰囲気の中でリラックスし、心ゆくまで語り合うことができるのです。自分たちの職場や家庭などでは、話しあいも堂々巡りとなってしまうことが多いものですが、全く違った環境に場所を移すと話し合いがスムーズにいく場合があります。そのような場をフォーティフォーは提供してきました。

英国の有力紙、タイムズの労働者のストライキが起きた時には、タイムズの労使幹部の方をおよびして、状況打開のための話し合いと晩餐会が開かれました。定期的に国会議員も招いて、国内、国外のことを論じ合いながら、良心に耳を傾けてその声を聞き、率直な話し合いがもたれました。又、日本のお客様も多く、ある時は駐英大使御夫妻をおよびして、国の良心のために戦っているアフリカ人に会っていただきました。

人間の考えは、とかく自分中心や、私利私欲に基づいてしまうものですが、ここで生活しながら私は、ひとりひとりが絶対標準である正直、純潔、無私、愛を自分に照し合わせて、まず自らがその過ちを認め、全ての思いわずらいをいっさい神にゆだねて、心の声を聞くことからやらなければならないことを知らされました。その時、それぞれの負わされた責任やとるべき態度が示され、そのガイダンスを勇気を持って実行した時に状況が変わるのだ、ということはこの目でみました。そして全ての始まりは、ひとりひとりの決心によるのだということをお教えされました。

私はその後、英語をさらに勉強するために、オックスフォードで6ヵ月間滞在することになりました。フォーティフォーで家事をしていた私にとっては、学生になることは思いもよらないことでしたが、これはある朝、静かに心の声に耳

●オックスフォードにて……
ペイナード・スミス夫妻と
(右端が市原登志子さん)



を傾けた時に私に与えられたガイダンスでした。友人たちも同意してくれ、両親の援助によって必要経費も満たされ、実現することとなったのです。

オックスフォードでは、やはりMRA運動に献身されていたペイナード・スミス一家に、お世話になることになりました。御夫婦と、83歳になっても毎日車を運転しているおばあちゃん、14歳のピーターと8歳のチャメツ気たっぷりなクリスという、5人家族でした。ここの御夫婦は、エチオピアに長く生活していたこともあり、よくアフリカ人の友人たちが来ました。又日本でもフルタイムとして働いて下さったことがあるそうです。街の中心にある英語学校に昼間自転車で通い、帰ると奥さんと食事をしたり、買い物にいたり、ピーターとはテニスをしたり、おばあさんとは草むしりなどを一緒にしたりしました。ここで私は、ふつうの英国家庭を見ることができ、又自ら体験することができました。

オックスフォードは、石造りのカレッジの建物や古い教会堂のならぶたいへん美しい街であると共に、国際色豊かな街です。多くの日本人にも会いました。私の通っていた英語学校にも、日本人が何名かいました。短期間で生きた英語を身につけたくて来ていた学生、いろいろ思うところがあって仕事を辞めてきていた女の人とさまざまでしたが、期間が短かったことや、日本人同士でかたまってしまったりして、英国人との交流の機会も与えられず、イギリスの良い印象よりも、むしろ悪い面ばかりをおみやげに帰国する人が多いようでした。

毎日宿題に追われ、日本人たちで行なわれていた聖書研究会などのサークルに入りながら、楽しい面もありましたが、多くの波風にもぶつかりました。ロンドンの大きなハウスにいた時は、気ごろのしれた人たちと生活をし、いつも私を手とり足とりで助けてくださり、まるで温室の中で保護されたような状態にあった私が、オックスフォードに来ることで、表へほうり投げ出された形になったのです。家の規模が小さくなったために、私一人の役割が多くなりました。ロンドン



覚えざりし罪

瑞龍寺 権大僧正
小笠原日英

三浦綾子の小説『続氷点』に次のような一節がある。

「ある人がね、牧師に、私には罪はない、なぜキリスト教は人間をすべて、頭から罪人扱いにするのか、それは一体どういうことなのだ、と詰めよったそう。するとね、その牧師が、じゃ君、あの大きな石をこまごま持って来てくれないか、と庭の石を指した。その男は、漬物石の倍もあるその大きな石を、よいこらしよと、運んで来た」

こから運んで来たかはつきり覚えていない。だが、たぐさんの小石は、どこにどの石があったかわかるわけではない。小石は一つも元にもどせなかった。

「おもしろいお話ね」

聞き終えて陽子がうなづいた。「おもしろいだろう。つまり、人を殺した、強盗に入った、これが吾々には大きな石なんだね。しかし、うそをついた、腹を立てた、憎んだ、悪口をいった、などという日常茶飯事は小石なんだな。つまり、ひとには始末のつけようがないんだね」

罪の問題については、何が罪であるかという議論よりも、罪に対する感覚が研ぎ澄まされていくかいないかという反省の方向が遙かに大事である。正しい信仰は、罪に対して鋭敏に反応する感覚を養わずにはおかないもので、この感覚こそはまさしく信仰の賜物である。罪の報いは、罪の感覚が更に鈍るところにある。私達は罪感覚の鈍磨を妨ぐために、絶えず反省を怠らず、正しい日常生活を心がける必要がある。悪い習慣ほど身につ

やすいものはないからである。知っていながら私達は往々にして悪を思ってしまう。しかも自分が罪を犯しているという自覚を伴わずにである。これはどこにその原因があるのかというと、悪を思う正当な理由があると思つたためである。

相手によって自分は苦しめられたのだからという理由で相手を憎み続ける時、われわれは自分が犯している罪に無感覚になっている。罪の感覚の鈍化は自己を被害者の立場におくところから始まるようである。

では、どうすれば、相手が害を加えた時でも憎み返さない、悪に報いるに悪を以てせず、という想いが抱けるのであろうか。それには、より高い視野に立つて、問題を客観視することである。相手を分析することは、相手にとらわれるだけで、なんら問題の解決には役立たない。

問題そのものにとらわれるのではなく、問題が起こって来た背景を知り、自己の中に加害者としての想いがなかったかどうかを探る事である。自己を自己が相対化して見る

にいた時は人数も多かったのですが、お客様がいらしても、疲れたと言って部屋にいてもできませんでした。出てきて家族の一員としてもなかなければなりません。又、学校やサークルでは多くの問題もあり、MRAで訓練を受けてきた私がある目の前にある問題にどう対処していくべきなのか、という心の葛藤もありました。

家族をなくし、自分の国もなくなって生きてる人に出会い、「今、自分の生きている環境をそのまま受け入れ、自分が生活を共にしている人たちを、ほんとうの自分の家族のように心から受け入れることができるのだろうか。」と自問しました。自分の国は日本で、家族もそこにいて、今私は遠い国に滞在しているだけなのだと思いがあった私にとって、大きな挑戦でした。そういう経験の中で、ほんとうの意味での精神的なひとり立ちをしなければならませんでした。その頃までに見出ししていた信仰をもって、オックスフォードでの私の家族に支えられながら、石畳の街を自転車走らせていました。

眼が、やがて冷静に受け容れられる真の原因を見出すのである。絶えず旧き自己をすてて新しき自己を造ろうとする努力の中にその生命を得る。その時、私達は自己の心に果喰う様々な罪の芽を自覚できるようにするといえるのではないだろうか。

「本人から許可を得て、『一心会』発行の『こすもす』より、転載させていただきます。



●オックスフォードで母さんと一緒に



◇コミットメント(献身)へのその二◇

コミットメント(献身)に欠かせない重要なことは、チームを作るといふことである。善意に満ちた個人主義者が、成果をあげることなく、挫折したり沈黙してしまうことが多いのは、チームをどう作り、チームの一員としてどう働くかを知らないからである。また一人殉教者が現れても世の中は相手にせず、結局以前と同じ道をたどるしかない。

共通の目的を持って団結したグループは、そう簡単に無視されることはない。彼等はいつものとか突破口を見い出そうとつとめる。従ってこれと対抗しようとする人々は、より一層意を

連載 10

人と機構

イエンツ・ウィルヘルムセン

決してかかるわけである。迫害が無いといふことは、結局やっつけていることが安全無害だといふ確かなしるしでもある。

チームを築くことは難しいことである。「皆が同じことを信じているのに、お互いのライバル意識や足の引つ張り合いに、どう対処していいかわからない。」とマルクス主義者のグループの一人が私に述べたことがあるが、これは宗教界も含めた他のグループにも存在することがよく知られている。

難しい人々と協調して働くという挑戦を、多くの人が避けようとする理由もここに存在する。しかし、こうした逃避主義につ

けを払うのは社会である。他の人をたてゝことを学ぶことも、しっかりまとまったグループを作る一つの鍵である。これは自分についてと同じように、グループ内の他の人々の成長や運命に関心を払うといふことである。もう一つの鍵は、各自の独立性と人格とを尊重するといふことである。グループ全体の前進のためには、個々人の違つた意見を無視しがちなものだからである。また動きの統一を確保するために、人の恐れや野心といったものを巧みにあやつろうといふ衝動にもかられることがある。

これがうまくいくことがあつたにしても、なされるべき仕事の最上の利益とはならない。共に前進することは、たしかに強くなることである。しかし、個人の人格の犠牲の上にそれが行なわれるのであれば、その強さも実際よりは見かけのものにすぎない。各自に善悪の観念が深く根づいていなければ、方向付けに不可欠なよりどころが失われてしまい、様々な失敗が起りやすくなってしまう。

効果的な勢力を作るためには、

自ら指導者であると同様に、面倒見のよい羊飼いのような資質が要求される。つまり物心両面にわたって、その人の人間全体に関心と思いやりをもつていくことが必要であり、言ってみれば真の友人になるといふことでもある。

自分に向けられる思いやりや関心が本物であるか計算づくであるかは、殆んど誰にでもすぐわかるものである。誠実さが一つの目安になる。役に立たなくなつたとたんに思いやりが止まつてしまうようでは、その純粋さが疑わしくなってしまう。

社会悪と立ち向かうグループにとつては、本物の友情がより一層大切である。自分達の思うままに世の中を動かそうとする、無節操な人達の妨害にもあうからである。よくまとまって打ち込んでいるグループのみが、それに立ち向かい道を切り開くことができる。

しかしながら、どんなに献身的でまとまったグループであっても、いかにして突破口を見い出すかという戦略を持たなければ、効果的な動きにはなり得ない。そして権力の中核に到達す

るといふことも、この戦略の中に、含まれなければならない。

全体の方向を決定しているのは船橋(ブリッジ)であるのに、船の片隅だけで良い仕事をしていることで満足をしている人が多過ぎる。本気でことにあたる気があるならば、船橋の人が持っている考えが他の人のために生かされるようにしむけるか、或いは自ら船橋上での地位に選出されるべく闘うべきである。聖パウロはその情熱をもって、当時の超大国の首都ローマに、自分の理念と主張を伝えることができた。

レーニンとは、ただ単にロシア全土に革命的な細胞を組織することだけで満足したのではなく、マルクス主義者によって支配されるロシアというものを望んだのである。MRAの創始者フランク・ブックマンも、これに似たような情熱を持っていた。「世界は神に導かれた人びとによって導かれねばならない」というのが、彼の最後の言葉であった。今日のように多極的な世界において、権力の中核といふものを定義し、それに影響を与えることは難しいことである。既成

体制の権力というものも、かつてのようではなくなってきた。草の根運動や献身的な少数派が擁する潜在的な力も、これまで少なからず示されてきている。学校においても、イデオロギーをもった管理人の方が校長より力を発揮するかもしれない。モスクワとワシントンも、かつてほどはつきりした力の中枢ではない。

戦略的に動くということは、最も困難な所に足を運び、人がある。それは様々なレベルにおける汚職、破壊的なイデオロギーによる浸透、地域社会における社会的人種的な偏見、激しい対立の根にある利己主義や憎しみ、といった問題であろう。

問題の核心を見出す為には、どんなに知識に富んだ人間の頭脳よりも高い次元から発する方向づけの源が必要とされる。現在、核、人口増大、食物や資源の不足、汚染、そして科学によって非人間化された社会など、多くの脅威を地平線に見ることができ。こうしたことを調整できる指導者は、ワシントン、

パリ、モスクワ、北京のどこにもいない。安全な道をするところができるのであれば、それは全ての創造の目的と運命とを掌握する創造主に他ならない。それが何であるかは、聴くことによつて発見することができる。人が聴くとき神は語り、人が従うとき、神は働く。

教授であれ、文盲であれ、北極の漁師であれ、インドの農民であれ、誰であらうとこの同じ源から方向づけを得ることができ、こうして世界の悪に一九となつて立ち向かう一員となりう

ガイダンス 2

すべての人は、相手さえ変わってくればよい、と思つていきます。親は子に、子は親に、夫は妻に、妻は夫に、嫁は姑に、姑は嫁に、数え上げれば切りがありません。このことは古今東西、どんな体制の中でも信条の人達の中でも、共通のようです。どこへ行っても人間の弱点は同じだといえます。しかも個人的なことはかりではなく、会社の中でも労働が互いに相手に変わつてほしいと思ひ、国家間でも同じことで、相手の足りないところはいろいろでも挙げつらうところが出てきます。人を批判するこ

とも同じです。うっかりするとこれ程面白いことはないといばかり、流行にさえなりかねないのです。でも、みんな相手が始めるのを待っているばかりなので、一向に状態は良くならないところは、多くの人が体験しているところでは、あげくの果ては、どうせどうにもならないと諦めてしまふことになりかねません。

これは「百年河清を待つ」のと同じことです。しかし、本当に状態を変えたいと思ひ、解答を得たいと願うのだったら、一番確かな出発点は自分だとMRAは言います。世界中で自分を自由にできるのは、自分しかないからです。

自分から始めるんですって？ そんなことが出来るのかと言いたいところですが、このままではとても我慢できないという心境になった時、清水の舞台からとび降りる気持ちで、思い切つてみない自分の心を真正直に見つめて、変わる決心をしてみることで。

その場合、人と比較して自分を評価するのではなく、絶対の標準（絶対正直、絶対純潔、絶対無私、絶対愛）に照らして、心の声に耳を傾けてみて下さい。思いがけないほど心が自由で、楽しい新しい人生の第一歩を経験されるでしょう。

MRA日本協会は社団法人化を目指して 会員数増加のキャンペーンを行っています。

国際MRA日本協会は昭和五十年に設立されて以来、世界各国のMRAチームの人々と共に手を携えて、調和ある産業や社会、さらには平和な国際関係の実現を目指して活動を続けてまいりました。毎年開催される国際MRA会議もその一環であり相互理解と信頼の絆は年々強まっております。他にも人材育成のための研修生の海外派遣、研究会、講演会の開催等々、日本人の「心の開国」を押し進めるために活動してまいりました。

さて当初任意団体で発足いたしました当協会も、MRA事業の一層の拡大をはかるべく、社団法人化を目指すことになりました。これを機に会員の増加をはかるキャンペーンを開始いたしました。また、

● 個人正会員（年額）
100円、1,000円
● 法人正会員（年額）
100,000円、1,000,000円

● 払込先（郵便振替が便利です）
郵便振替口座：
東京0013002000

● 銀行口座：
富士銀行 動坂支店
(普通)006-06012200

会員になってMRAを支えて下さい！

入会御願ひ

MRA. 世界の動き

- **インド**……10月12日～18日に、完成以来15年を迎えたインドのセンター「アジア・プラトウ」において、「理解のための対話」というテーマで会議が開かれ、北東インドと、他の地域からの約150名が参加
 (北東インドは、人種や宗教の異なる少数民族が独立のために戦い続けている、いわば「インドの火薬庫」ともいえる地域)
- **オーストラリア**……政治家による汚職の発覚があいつぐこの国で10月21日に、首都キャンベラの国会にて、「買収し得なかった男」という、ケア・ハーディの劇の朗読が行われた。(ケア・ハーディは、スコットランドの鉱夫から、イギリス労働党の最初の党主となった人)
- **スコットランド**……10月28～30日に、「どうしたら到達できる? ——行き詰まりから打開への道」のテーマで会議が開かれ、140名参加。
- **アメリカ**……ワシントンD.C.において、11月11～13日にかけて会議「新しいリーダーシップの概念」が開催され、21か国から200名が参加。
 「指導者層をささえていく早道は、その人々に期待する倫理を、一般市民の私達が自らに課していくこと」という点で意見が一致。

MRA 国際会議の御案内

国名	テーマ	時	場所
チリ	「よりよき世界を求めて」	昭和59年 3月27日～30日	エル・コラソン (サンチアゴから87km)

●事務局近況●

●二年間の滞在予定で、スコットランドのクレイグ一家が日本の地を踏んでから既に一年半——三才になる一人息子のフィリップ君は驚異的な早さで日本語を覚えるので、まわりもすっかりしたことは言えません。田端のハウスをきりもりして下さる小門さんを、いつも「カド、カド」と呼んでいるフィリップ君、先日叱られた時は急にしおらしく「コカド・サン……」——既に処世術を身につけたかと、みな感心することしきり。

●十二月十五日現在、会員数は一七二九名に達しました。次の目標五千名を目指して、どうかよろしくお願い申し上げます。

●みなさま、良いお年を!

※なお、来年の5月18～20日には、外国の方々をお迎えして、恒例の小田原国際会議が、後には東京、大阪、神戸、埼玉、茨城、栃木等での数々の行事が予定されており、ます。ふるって御参加下さい。

※詳しくは、国際MRA日本協会事務局

(〒113 東京都文京区千駄木四―1―314)

TEL 〇三―八二―一三七三七)へ。